

## 「ヤコブ、祝福を奪う」

2021年03月15日

「息子よ、私がお前に命じることをよく聞きなさい。家畜の群れのところへ行って、その中から肥えた子山羊を二匹取って来なさい。私がそれでお父さんの好きなおいしい料理を作ります。それをお父さんのところへ持って行き、食べていただきなさい。そうすれば、亡くなる前にお前を祝福して下さるでしょう。」(創世記 27 章 8 節～10 節) ヤコブが近寄って口づけすると、イサクはその衣服の香りを嗅ぎ、祝福して言った。「ああ、わが子の香りは／主が祝福された野の香りのようだ。神があなたに、天の露と肥沃な地を／豊かな穀物と新しいぶどう酒を／与えてくださるように。もろもろの民はあなたに仕え／諸国の民はあなたにひれ伏すように。あなたは兄弟の主(あるじ)となり／母の子らはあなたにひれ伏すように。あなたを呪う者は呪われ／あなたを祝福する者は祝福される。」(創世記 27 章 27 節～29 節)

創世記 27 章から、ヤコブ物語の本論が始まる。ヤコブは 12 人の男児をもうけ、イスラエル 12 部族の祖となった人で、神から「イスラエル(神、支配したもう)」という名誉ある名をいただいている。創世記は、イスラエル人の祖ヤコブ物語を描くために書かれたと言う人もいるくらい、彼は重要な人物である。ヤコブの生涯は波乱万丈で、肉体的な苦勞はもとより、精神的な苦悩も重く、深い。自分で選び取った人生であるが、そこに待ち受けていた苦難は想像を超える。それらを乗り越えていくために、生来のタフネスを武器に果敢に闘いを挑んでいる。しかし、彼の心の支えは、事ある毎に神の守りと祝福を幼子のように祈り求める信仰である。彼は神を渴望し、神は応えてくださった。人生の深淵を見せられた苦難と神の選びの祝福に与った信仰者の生き方をリアルに伝えている。

父イサクは年を取り、目がかすんで見えなくなった時、長男エサウを呼んで、「御覧、私は年を取って、いつ死ぬか分からない。だから、狩りの道具、弓矢を持って野に行き、私のために獲物を捕って来てくれ。そして私の好きなおいしい料理を作り、それを持って来て、私に食べさせてほしい。死ぬ前に私自ら、お前を祝福したいのだ」と言った。族長は死ぬ前に長男を祝福し、長子の権利を譲渡する大事な式を行うのである。イサクは、今それを行いたいと言っている。母リベカは、夫が長男に話しているのを聞いていた。リベカはヤコブを呼んで、大胆な行動に出た。お父さんはエサウに獲物を捕って来て、おいしい料理を食べさせてくれ、死ぬ前に、主の前で祝福したいと言っていた。そこで、「息子よ、私がお前に命じることをよく聞きなさい。家畜の群れのところへ行って、その中から肥えた子山羊を二匹取って来なさい。私がそれでお父さんの好きなおいしい料理を作ります。それをお父さんのところに持って行き、食べていただきなさい。そうすれば、亡くなる前にお前を祝福して下さるでしょう」と言った。兄エサウが受ける祝福を、かわりに弟ヤコブに受けさせるという算段である。ヤコブは心配して、「でも、兄さんのエサウは毛深い人ですが、私の肌は滑らかです。お父さんが私に触れるなら、私がふざけていると思うでしょう。そうすれば、私は、祝福どころか呪いをこの身に招くことになります」と答えると、リベカは毅然として、「息子よ、その呪いは私が引き受けます。お前は、ただ私の言うことを聞き、行って子山羊を取って来なさい」と命じた。ヤコブが子山羊を取って来ると、母はイサクの好きな料理を作った。そして、エサウのよい服を取り出して着せ、子山羊の皮をヤコブの腕と首の滑らかなところに付けて、おいしい料理とパンをヤコブに持たせた。

リベカは、夫を騙してまでして、なぜ、エサウが受けるべき祝福をヤコブに与えたかったのか。イサクは狩りの獲物が好物であったのでエサウを愛していたが、リベカはヤコブを愛していた。また、エサウは異教のヘト人の娘二人をめとり、そのことが両親の心の痛みであった。リベカはエサウを受け入れ難く、ヤコブを偏愛していた。しかし、祝福をヤコブに与えたかった最大の理由は、胎内で双子が争い合った時、神が「兄は弟に仕える」と、神の選びは兄エサウではなく、弟ヤコブに与えると聞いた。この神の言葉にリベカは従おうとしたからではないか。聖書では、神の言葉が最優先し、人間の思惑を超えて、それが実現していく。ヤコブへの偏愛だけではなく、神の言葉への追従が、夫イサクを騙した理由であると理解すると、リベカの振る舞いが納得できる。

ヤコブは「お父さん」と呼びかけ、「私は長男のエサウです」と偽った。「言われたとおりにしてきました。さあ、座って私の獲物を食べてください。そしてお父さん自らが私を祝福してくださいますように」と言った。イサクは、「どうして、こんなに早く見つけることができたのか、息子よ」と聞くと、ヤコブは「あなたの神、主が取り計らってくださいましたからです」と、神の名を借りて弁解している。イサクは、「息子よ、近くに寄りなさい。お前が本当に息子のエサウなのかどうか、触ってみたいのだ」と、いささか疑いを持っている。ヤコブが近寄ると、イサクは触って、「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ」と言った。腕と首に付けた子山羊の毛に騙され、見破ることができなかった。イサクは祝福しようとして、再度、「お前は本当に息子のエサウなのだ」と確かめるので、ヤコブは「そうです」と答えた。ヤコブはこの時、父に見破られるのではないかと、心臓が破裂するような思いであったろう。しかし彼も、兄エサウが野の獲物が取れず、空腹で帰った時、赤いレンズ豆の煮物を代価にして、長子の権利を買い取っている。ヤコブは、母リベカ以上に、父からの祝福が欲しかったのである。父イサクからの祝福を勝ち取るために、神を用いてまでも、騙し通そうと必死であった。イサクはようやく、「では、獲物を持って来なさい。わが子の獲物を食べて、私自身がお前を祝福しよう」と言った。ヤコブが持って来ると、イサクは料理を食べ、ぶどう酒を飲んで満足した。母リベカは夫の好きな料理を知っているので、そのように作ったのである。そしてイサクは、「息子よ、近くに寄って、私に口づけしなさい」と言う。近寄ると、エサウの衣服が、野を駆け巡り、獲物を追う野の香りがした。イサクは、それを嗅ぎ、祝福して言った。「ああ、わが子の香りは／主が祝福された野の香りのようだ。神があなたに、天の露の肥沃な地を／豊かな穀物と新しいぶどう酒を／与えてくださるように。もろもろの民はあなたに仕え／諸国の民はあなたにひれ伏すように。あなたは兄弟の主（あるじ）となり／母の子らはあなたにひれ伏すように。あなたを呪う者は呪われ／あなたを祝福する者は祝福される。」イサクが持つ祝福は完全にヤコブに譲渡されたのである。

リベカは、夫はお人好しで、騙されることを見越していた。ヤコブは、動転するような気分であったが、祝福をもらおうと必死で、騙し通した。見事に、リベカの策略は功を奏し、ヤコブの願望も達し得た。神の祝福はヤコブのものとなった。ヤコブは、この出来事を踏まえ、自分の人生を切り拓いてゆく。神が共にいて、アブラハムに告げられたように、諸国民に仕えられる大いなる者とされ、祝福の基とされてゆく。

これは、族長物語における譲渡の出来事である。新約聖書においては、主イエスの十字架と復活によって、全ての人が赦され、神からの絶対的な是認という祝福に与っている。